

文化財報道とSNS 博物館の「撮影解禁」を取材して

今井邦彦（朝日新聞西部報道センター）

No Photography! Social Networking Services and Cultural Heritage News

Imai Kunihiko (Asahi Shimbun Fukuoka News Center)

- ・ 展示室での写真撮影／Photography in exhibition rooms
- ・ 文化財報道／Cultural heritage news
- ・ 新聞とSNS／Newspapers and social networking services

1. はじめに

今年（2021年）7月、朝日新聞西部本社版の九州・山口各県向け文化面「カルチャーWEST」面と、ネットの朝日新聞デジタルで、館蔵品が並ぶ常設展では写真撮影を許可する博物館、美術館が増えている事を記事にした。その取材では、端緒をつかむところから情報収集、そして取材相手との連絡まで、SNS、主にツイッターとフェイスブックを多用することになった。その中で日本考古学協会のセッション「オープンサイエンス時代の考古学・埋蔵文化財情報」の参加者と意見交換する機会があり、文化財報道とSNSの関係について書くように勧められた。私自身、もともとは会社の業務としてツイッターを使い始めて8年たち、今ではスマホを手にとれば、ツイッターでニュースをチェックするようになってしまっている。自分の利用歴もふりかえりつつ、文化財ニュースの媒体としてのSNSについて考えてみたい。

2. ツイッターに積極的な朝日新聞

私がツイッターの利用を開始したのは2013年9月26日。「今日からツイート始めます」で始まる最初のつぶやきには写真もなく、リツイートも「いいね」も一つもつかないスタートだった。次第に取材で撮った文化財の写真をアップしたり、目にとまった歴史・文化財の話題を積極的にリツイートしたりすることを覚え、フォロワー数も順調に増加。現在

は約2万7千人にフォローしていただいている。

実は私がツイッターを始めたきっかけは、半ば「社命」によるものだった。朝日新聞は12年から「顔が見える記者」を掲げて、専門知識の豊富なベテラン記者や海外取材の第一線で活躍する特派員に実名でのツイッターを推奨している。3年半のデスク生活を経て、13年4月から専門記者である編集委員として書き手に戻った私にも声がかかり、研修を受けたうえで「9月末までにアカウント開設を」と迫られた。「書くことがない」「アプリを触っている暇がない」と先延ばしにし、期限ギリギリになって「仕方なく」始めたと言うのが正直なところだった。

朝日新聞で公認のアカウントを持つ記者は、ニュースサイト・朝日新聞デジタルの「記者ページ一覧」で確認すると、21年12月現在で約250人。このほか、出稿部や地方総局のグループアカウントも200以上ある。ほとんど投稿が途絶えている「幽霊アカウント」もあるとはいえ、新聞社では異例の多さだろう。

私がツイッターを始めて1年ほどたった14年9月、そんな記者アカウントの存在が注目される事件が起きた。朝日新聞が自社の従軍慰安婦報道検証を「遅きに失した」と批判したジャーナリスト・池上彰氏のコラム掲載を見送ったことが週刊誌で報道されると、社内の記者から社の対応を問題視し、批判するツイートが次々と投稿されたのだ。「深刻な危機感を感じています」という私のツイートまで、い

くつかのニュースサイトやまとめサイトに引用された。結果的に朝日新聞が非を認めてコラムを掲載し、池上氏とも和解したが、朝日新聞の記者が個人の意思でツイートしていることが世に知られた出来事だった。

もちろん、そうした判断が誤ることもある。記者の不用意なツイートが「炎上」を招き、社が紙面でおわびを出したケースもあった。それでも、社が記者によるツイッターを制限しないのは、新聞が多様な個性を持った人たちによって送り出されていることを読者に知ってもらうことに加えて、SNSが情報の発信、収集のツールとして非常に有効であることが共通認識になっているためだろう。

3. 記者ならではの情報整理を

種々雑多な情報がSNS上にあふれる中で、私自身は歴史を中心とした文化ニュースの発信が役割だと考え、自分が取材したニュースの紹介や、社内で別の筆者が執筆した歴史・考古学関連ニュース、社外の関連情報のリツイートに注力している。各種の情報を自分なりの見識で「値踏み」しつつ、「まとめサイト」的に発信していると言えいいだろうか。

文化財に関するツイートでも、発掘調査の成果や新たな古文書の発見など、「ニュース」への関心はやはり高い。こうした話題の多くは自治体の教育委員会や研究機関が発表しているが、地方紙などに記事を配信する通信社はネットでのニュース提供もスタートダッシュが早く、そのニュースが通信社と地方紙、両方のアカウントでツイートされる。朝日新聞デジタルへの記事のアップは遅れることが多く、それを待って単純にツイートしても埋没してしまう。そこで私の場合、ツイートを連投して何か新しい情報を付け加えるように心がけている。自分がこれまでの取材で撮影した写真や、過去の関連記事へのリンク、発表者側が報道発表資料をネットにも上げている場合は、そのサイトへのリンクなどだ。

最近、そのリンク先として、奈良文化財研究所（奈文研）「全国遺跡報告総覧」や、各大学のリポジ

トリにアップされた発掘調査報告書、研究報告などを活用することが多い。テレビの歴史番組で、奈良県明日香村の中尾山古墳が真の文武天皇陵説だというのが紹介された際には、ツイートで感想と共に「奈良文化財研究所紀要」に掲載された宮内庁所蔵の金銅製四環壺の分析報告にリンクを張ったところ、深夜だったにも関わらず、すぐに80件近いリツイートと300件以上の「いいね」がついた。かなり専門的な情報でも、少なくないフォロワーが関心を示してくれることを実感した。

また、奈文研が「遺跡総覧 WebGIS」の運用を始めたという朝日新聞デジタルのニュースを、「自分が住む場所の近くに遺跡があるかどうか、すぐに調べられます」と書き添えてリンクしたツイートには、数日にわたって反響があり、リツイート3500件、「いいね」5100件と、自己最高の「バズり」を経験した。

インターネットやSNSは、学術的、専門的な情報にも簡単にアクセスできる状況を作り出している。日々のニュースと、そうした膨大なネット上の文化財情報を橋渡しするのも、我々マスコミの仕事の一部だと考えている。

4. 展示室の撮影解禁を取材

SNSを利用してフォロワーの反応がよく、自分自身でも書いていて楽しいのが、各地の博物館や資料館、史跡の紹介だ。今回、この文章を書くにあたって、8年前にツイッターを始めたころの自分の書き込みを読み直したが、早くも3回目のツイートの、青森県八戸市・是川縄文館に展示された土偶の画像をアップし、「最近、フラッシュを使わなければ撮影自由、という博物館が増えてきました」と書いていたので、自分の関心の変わらなさに驚いた。

2019年5月、大阪本社から福岡の西部本社に異動になり、初めて九州・山口で取材することになった。それから2年半。見るものすべてが珍しく、取材、プライベート問わず各地の博物館・資料館を回り、展示の撮影が許されている館は積極的に画像を使ってツイッターやフェイスブックで紹介してき

た。だが、九州最大の九州国立博物館（九博、福岡県太宰府市）が常設の文化交流展示室を撮影禁止にしていることが、ずっと引っかかっていた。

今年5月上旬、九博のホームページで、同館が4月から文化交流展示室の撮影を解禁していたことを知った。早速、その情報をツイッターに書き込んだところ、あっという間に270件のリツイートと、440件の「いいね」がついた。反応の大きさに驚き、数日後に九博を訪ねて実際に撮影をした画像をアップすると、今度はリツイート320件、「いいね」690件（直後の数字）と、さらに大きな反響があった。博物館の写真撮影について、多くの人が関心を持っていることを実感して、「これは記事にしなければ」という気持ちがわいた。早速、九博に取材を申し込んだ。



今井邦彦 Kunihiko... 2021/05/14 ...
九州国立博物館の常設展「文化交流展」が撮影・SNS投稿OKになったとつぶやいたところ、結構な反響があったので、取材の後に確認してきました。しっかりパネルに明記されています。これで「伊都国王墓」とされる、福岡県糸島市の三雲南小路遺跡1号甕棺の復元展示も、ようやく写真で紹介できます！



図-1 九博での撮影についての筆者のツイート

九博展示課によると、以前から文化交流展示室の撮影解禁は課題になっていたという。一方、05年開館と歴史が浅いために館藏品は潤沢ではなく、展示品には自治体からの借用品や寺社からの寄託品も多い。そのため、18年度から3年をかけて、借用品、寄託品すべての所蔵者に撮影の可否を確認した。さらに、20年にはワーキンググループを立ち上げ、撮影をめぐる問題点をリストアップ。著作権についての考え方なども整理して解禁に臨んだ。所蔵者が撮

影不可とした寄託品には撮影禁止のマークが表示され、展示室入口の看板には「写真を撮ろう SNSにもアップしよう」と大きく明記された。

ちょうどそのころ、ツイッター上では博物館での撮影をめぐる議論が起きていた。考古遺物をモデルにしたバッグ、ポーチなどの革製品を製作している福岡市の宮野弓絵さんが「博物館の写真撮影& SNS アップ、禁止のところもあるけど何がいけないのかを教えてほしい」とツイートしたのに対して、賛否様々な意見が寄せられたのだ。宮野さんにはツイッターのダイレクトメッセージで連絡を取り、会って取材することができた。福岡県周辺の博物館、資料館でも展示室での撮影の可否が分かれるだけでなく、撮影はOKでも、SNSでの使用は認める館とダメという館があり、戸惑っているという。「博物館の魅力がSNSで広まれば、ファンも増えるはず。撮影やSNSへのアップはNGという館も、本当にそうしなければいけない理由があるのか、もう一度考えて欲しいと思った」と語ってくれた。

この問題は、5月23日に日本考古学協会総会で開かれたセッション「オープンサイエンス時代の考古学・埋蔵文化財情報」でも話題になり、「画像が不適切な使われ方をされないか」「図録や絵はがきが売れなくなるのでは」という博物館側の懸念も聞くことができた。その取材をきっかけに、セッションのコーディネーターをしていた考古形態測定学研究会代表の野口淳さんに話を聞くことができただけでなく、野口さん主宰の展示室の撮影をめぐるオンライン討論会にも参加する機会をいただいた。取材中のテーマについて、自分も議論に参加し、それがまた記事に反映されるというのは新鮮な経験だった。

取材を通して、博物館・資料館側にはSNSで紹介されることによる宣伝効果やファンの増加への期待と、撮影された画像がどう使われるのか分からないという不安の両方があることが見えてきた。スタッフのマンパワーが十分ではない館、特にネットやデジタル機器への対応が遅れている館では不安の方が勝り、撮影やSNS利用の解禁に踏み切れないよう

だ。一方、規模や人員の問題とは別に、奈良や京都の国立博物館のように寺社や個人からの寄託品が多い館は、所蔵者への配慮から撮影解禁に慎重であることが印象に残った。

これらの取材を元にまとめた記事「展示の撮影解禁、現状は」は、7月14日付けの朝日新聞西部本社版朝刊「カルチャーWEST」面に掲載された。これは九州・山口にしか届かない紙面だったため、ニュースサイト「朝日新聞デジタル」にも売り込んだところ、紙面より9日遅れでアップ。初日は2万件強のビューがあり、西部本社発のニュースではこの日、2番目に多く読まれた記事になった。



図-2 朝日新聞西部本社版2021年7月14日記事

5. おわりに

この文章を書いている間にも、またツイッター上

で博物館での展示品の「模写」をめぐる議論が起きた。江戸東京博物館（東京都墨田区）の特別展で、小学生の子供が土偶をスケッチしていたところ、監視スタッフに「模写は禁止です」と止められたという父親が、「こういうところが日本の博物館は子供に優しくない、教育に使われない」と怒りをこめてツイート。さらに経緯をnoteで公開したことで、これも賛否両論の声が起こった。同館では撮影について、常設展示室は可、特別展示室は不可としており、スケッチもそれに準じたとみられるが、館は親子に説明が不十分だったことを陳謝したという。

この件はスポーツ新聞に取り上げられたこともあり、普段は博物館に関心があまりない人たちにまで関心を持たれたようだ。館や親子への的外れな批判も多い一方、特別展でなければスケッチができる博物館が多いことを初めて知ったという声もあった。

気になったのは、博物館・美術館の関係者とおぼしきアカウントから、「ダメ出しするならまず予算をくれ」「多様化するニーズにどこまで応えればいいのか」といった、後ろ向きの反応が見られたことだ。文化財の「活用」が注目され、博物館や資料館にも今まで以上の集客が求められる一方、予算や人員は増えない、という現場の苦労や疲弊は理解できる。しかし、そうした状況を打開するには、いかに自分たちの味方を増やしていくかが重要になる。ツイッターはだれでも手軽に情報を発信することができ、拡散力も大きい半面、何げなく書き込んだ本音が、思わぬ受け取られ方をすることが少なくない。

考古遺物の魅力を革製品にして表現している宮野弓絵さんの作品を見ても、確かに博物館・美術館の「楽しみ方」は多様化していると感じる。展示を見て学ぶだけでなく、写真を撮って発信したり、スケッチして自分の作品に反映したりと、来館者の多様な楽しみ方を認めることは、館の味方を増やす一歩になるはずだ。取材する側としても、そうした変化があれば見逃さず、紙面やネットニュース、SNSなどを使って紹介していきたいと考えている。